

44 安政の大地震の記録 紹介

紹介者 窪野 茂

平成25年掛川市中央図書館古文書講座資料より抜粋

掛川市曾我地区（旧曾我村）天災地変記録

旧曾我村梅橋 伊藤清次郎様の古文書より（明治18年1月の記録）

安政の大地震の記録

嘉永7年（1854）寅の11月4日（新暦12/23日）五時半時（現午前9時頃）、すなわち辰の中刻と言う頃、大地震が発生した。東海道筋、東は三島宿より西は吉田宿（現在の豊橋）までの間24ヶ所の宿に渡り、そのうち掛川、袋井、浜松、舞阪までは第1級の強震に襲われ壊滅的な被害が発生したこれが世にいう安政の大地震（現在の震度に換算すると震度8位と推測される）

掛川市街中は70%にも及ぶ地域が焼失したと伝えられている。震災死亡者は250人余りだけで人等は数知れない程の被害としている。袋井市街中も80%にも焼失したとしている。死亡者、けが人等はおびただしい被害としている。その他宿も同様の被害が発生したにもかかわらず、山側に付いた宿場町は、大した被害はなく近隣の村々も、山に付いた村々の被害は軽く、当村梅橋の被害はひどく、自分の家の土蔵が半分程倒壊しましたが、本屋も半壊した。篠場村は7.8軒倒壊、平野村は10軒余、領家村は残った家が10軒余、4日夜に（午前2時頃）3軒焼失した、（松浦利右衛門宅のほか2軒）その時間には、誰一人火災場に行こうとする人はありませんでしたとの記録。領家村は80軒余が倒壊しました。その他細田村、沢田村、原川町、徳泉村、各和村、石野村は山に付いた所は20軒余残り、その他はほとんど倒壊した。その内、原川町は地震収まるや否や、火災が発生し、30軒余が焼失しましたが、死者はありませんでした。袋井、貫名上下地区、久津部、方丈村はほとんど倒壊、大池、新村も同様倒壊、垂木の谷側、倉真、西郷、原谷、山付き村々は倒壊家屋は少なかった。

大地震後30日余の間には、日夜20～25回程度の余震があったとの事、又5日の晩6時頃西方面にて雷鳴発生し、まさに大砲を打つかの如く10分ほど鳴り渡り、地震直後より人々は皆藪の中に入って竹にしがみつき、生きた心地は無かったとの事と言われた。余震は度々来て、5日夜も6日になっても、井戸の水はまだまだ清まず、金兵衛山（現在の小笠山）の西の谷から出る水を求める人々が多数あった。

6日の日、即ち発生3日目になって、大地震の時、野良に置いてきた農具、釜、鍬などを取りに行く気になったくらいの状態でした。特に欲しいものは無く、その辺にあるもので賄い、自他の区別はせず、10日間くらい生活するに精一杯でしたとの事でした。その後になって畑仕事も思い出し、田畑を見回る気持ちが少しづつ出て来たようでした。

この大地震で掛川城は壊滅、御屋敷地区も9割方倒壊、横須賀城は助かったが、御屋敷地区はほとんど倒壊したとの事でした。浅羽村々、浜側村々、見付町は被害少なく、池田近郷村々から浜松宿の間はほとんど倒壊したが浜松城は被害が少なかったようでした。

9日夜に中震（大きな余震）が来るなど不安定のため、14～15日位までの間は、ほとんど野宿する人が多数いました。

当家も半分程度倒壊しましたが、仮屋を建てて半年くらい暮らし、また、この年は豊年満作で地震後は30日間くらいは雨も降らず、野宿しても大丈夫のようでした。また、大地震の時に米蔵が半壊して米が散乱したにもかかわらず、誰一人盗む者もいませんでした。

この大地震の56年前、弘化4年3月14日夜11時頃（1798年）、長野県信州善光寺にて大地震発生があった。また、嘉永7年6月14日明け方、勢洲四日市市にて大地震発生し宿はほとんど倒壊、焼失し市中も半分程度倒壊したとの情報でした。

嘉永7年12月改元し安政元年となり、安政2年正月にも余震は発生している。

安政2年10月2日夜半に、江戸大地震が発生し、本所、深川その他平地はほとんど倒壊し焼失したが、山の手側の被害は少なかったとの事、またこの大地震での死者は20万余人にも登ったとの情報でした。

歴史文化情報センター資料抜粋

（NPO 法人掛川シニア交流研究会事務局提供）。

1 安政東海地震 (1) 津波の被害 嘉永7年 （安政元年）11月4日（1854年12月23日）遠州灘でマグニチュード8.4の巨大地震が発生した。関東から近畿及び山梨、長野県にわたり震度5から7の激しい揺れに見舞われた。さらに、房総半島から土佐までの沿岸部は、津波に襲われ、特に遠州灘沿岸部には6mの津波が押し寄せた。

2 安政南海地震 安政東海地震から32時間後の11月5日、先の地震震源地からはるか西の南海道沖でマグニチュード8.4の巨大地震が発生した。被害範囲は中部地方から九州にまでおよび、特に紀伊半島及び四国沿岸部に大きな被害を与えた。余震は40日間続き、人々は竹藪のなかで過ごしたという。

3 安政東海地震の余震 これに迫り打ちをかけるように安政2年9月28日（1855年11月7日）、遠州灘を震源とする安政東海地震の最大余震がおこった。先の安政東海地震で被害大きかった遠州灘沿岸が再び大きな被害をうけた。米津村（浜松市）で27軒が倒壊し、天竜（浜松市）では大沢口が崩壊した。舞阪宿では3～4箇所地割れが発生し、泥水が噴き出る液状化現象がおこった。

安政見聞録（防災専門図書館）

4 安政2年10月2日（1855年11月11日）、安政東海地震の余震の恐怖も醒めやらないうちに、江戸をマグニチュード6.9の直下型地震が襲った。江戸での民家の倒壊は14000軒以上、大火災も発生し、死者は1万人にも達した。この地震の影響は静岡県東部地域にも及び、下田では市中が



大騒ぎとなり人々は寺々へ避難している。先の安政東海地震の恐怖が蘇ったことであろう。

5 安政駿河地震 巨大地震はその後も発生した。今度は安政4年 5月 23日（1857年7月14日）マグニチュード 6.7 の直下型地震が、大井川下流を震源として発生したのである。特に藤枝あたりで強く揺れ、田中城の堀や石垣が崩れるなど被害がでている。駿府城下でも土蔵の破損など被害が発生し、余震があるたびに人々は広場に飛び出した。安政東海地震のことを思い起こしたことであろう。

図 安政東海地震の震度分布（土 隆一「地震と災害の特徴」『静岡県史』別編2 自然災害誌 1996 静岡県）

